様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２０日現在

研究種目：　基盤研究（Ｂ）
研究期間：2005～2008
課題番号：　17320075
研究課題名（和文）　**コミュニケーションのための教育文法に基づく日本語教材作成のための基礎的研究**
研究課題名（英文）　**Fundamental study for making of Japanese-language teaching materials based on pedagogical Japanese grammar**

研究代表者
小林　ミナ（KOBAYASHI, Mina）
早稲田大学・日本語教育研究科・教授
研究者番号：70252286

研究成果の概要：
学習目的，および，日本語レベルを考慮した，４技能別の日本語教材（試行版，紙版）を作成した。４技能あわせて 1000 弱のコンテンツが完成した。これは「学習者が行いたい／行わなければいけないコミュニケーション活動に必要な能力」という観点から，広く「文法」をとらえたものである。その教材を日本語教育機関の協力を得て実際に試用しフィードバックを受け，それに基づき改良を加えた。コンテンツの作成と同時に，ウェブでの公開のために仕様書を技能別に作成した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	**3,700,000**	**0**	**3,700,000**
２００６年度	**2,000,000**	**0**	**2,000,000**
２００７年度	**2,200,000**	**660,000**	**2,860,000**
２００８年度	**4,000,000**	**1,200,000**	**5,200,000**
年度			
総　計	**11,900,000**	**1,860,000**	**13,760,000**

研究分野：日本語教育
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：教育文法，教材開発，文法シラバス，技能別教材，ウェブ教材，多言語対応，インターネット

１．研究開始当初の背景

教室で教えた文法項目が教室の外でのコミュニケーションにつながるように，日本語教育の現場ではさまざまな工夫がなされている。たとえば，新しい文型を導入する際，学習者に身近な話題や場面を使うようにしたり，ある文型が自然に出てくる状況を作るためにインフォメーション・ギャップを生じさせたりといったようにである。ただし，それらは，「文型導入の場面設定」や「教室活動の見直し」というように，もっぱら「教え方」の工夫に関わるものであり，「教える内容」そのものは，これまで大きく見直されてはこなかった。しかし，学習者の多様化に対応するためには，言い換えれば，一人一人の学習者が，自分のコミュニケーションに必要な日本語を学んでいくためには，「教え方」を工夫するだけでは十分ではなく，「教える内容」についても抜本的な見直しが必要である。とくに，その土台となる文法が変わらなければ，真の意味でコミュニケーションにつながる日本語教育にはならない。

これが，このプロジェクトの根底にある主張である。

２．研究の目的
本研究は，次の３点を目的とする。
目的(１) ４技能(読む，書く，話す，聞く)ごとに独立した文法シラバスを作成する。
目的(２) 目的(１)の文法シラバスに基づき，学習目的，および，日本語レベルを考慮した４技能別の日本語教材（試行版）を作成する。
目的(３) 目的(２)で作成した教材を実際に試用し，フィードバックを得る。

３．研究の方法
上記の目的を達成するために，次のような方法でプロジェクトを進行した。
本プロジェクトのメンバーが究極的に目指す目標は，「新しい理念による日本語教育文法」を実際の日本語教育現場で使用可能な教材として完成させることである。そのためには，「新しい理念による日本語教育文法」をさらに精緻化，体系化することが必要である。このプロジェクトは，そのための基礎研究として位置づけられる。
「新しい理念による日本語教育文法」とは，次のようなものである。

◆日本語教育における文法を，これまで考えられてきたものより広くとらえる。
相づちや聞き返しといった会話のストラテジーはもとより，言語表現としてあらわれていない部分を推測，予測して聴解や読解を容易にするための方略，場面や人間関係に配慮して文法形式を選択できる能力，といったものまでを広く含めて考える。これらと従来言われている「コミュニケーション・ストラテジー」との違いは，本プロジェクトでは「これらの方略や能力を，常に具体的な言語形式との関わりからとらえていく」という点にある。具体的には，「聞く」場面で使う文法で言えば，「確かに～」と話を切りだされた場合，その後には「しかし～」といった反論が続くことが予測される。この傾向は，「確かに君の意見は正しい」などの判断文のときのほうが「確かに 8000 円は受け取った」などの現象文よりも顕著である，といった点である。

◆日本語教育における文法を，日本語学における文法研究の成果の応用ではなく，学習者が必要とする言語活動を支える一要素としてとらえ直す。
文法シラバスの内容や配列順序を，日本語学，あるいは，言語体系における「基本的用法／形式から周辺的用法／形式」という流れを応用することによって決めるのではなく，学習者にとって「必要性が高い用法／形式」「コミュニケーション上，注意が必要な高い用法／形式」という観点に基づいて決定する。たとえば，学習者が実生活で何かを「書く」のは，「約束の時刻に研究室を訪ねたが不在だった先生にメモを残す」といった具体的，個別的な活動である。このようなメモでは，不在の事実を述べるのに「先生はいらっしゃいませんでした。」という言いきりではなく，「いらっしゃらなかったようなので～」といった読み手を配慮した表現が求められる。「よう」「そう」「らしい」は，いずれも現在の初級シラバスで「推量をあらわす表現」として取りあげられ，推量の根拠によって違いが説明されているが，この状況で使えるのは「よう」だけである。このような視点は，具体的，個別的な活動を前提として初めて生まれるものであり，従来行われている「私の国」といった読み手や場面を特定しない作文では，学習されないものである。

◆日本語教育における文法を，言語技能ごとに独立した体系としてとらえる。
四技能，さらには，その下位分類（たとえば，メモを書く，論文を書く，メールを書く等）によって取捨選択できる柔軟性をもった文法シラバスを作成する。従来の文法シラバス，とくに初級の文法シラバスは，どの技能にも共通する汎用的なものが想定されていた。しかし，手段として音声を使う「聞く」「話す」と，文字を使う「読む」「書く」で言えば，たとえば，「飲む」や「雨だ」のような「です」「ます」が付かない普通形の意味がそれぞれで大きく違う。「聞く」「話す」では，普通形は聞き手が親しい人だったり目下だったりするときに使うものであり，「ね」や「よ」のような終助詞が付かないと，不自然に聞こえることがある。それに対して，「読む」「書く」では，普通形は聞き手を特に意識しないときに使うものであり終助詞が付かない。このように普通形の機能は，「聞く」「話す」と「読む」「書く」では大きく違うので，同じようには扱えない。

◆必要とする文法項目は，学習者によって異なるととらえる。
汎用的な文法シラバスをどの学習者にも与えるのではなく，学習目的，学習環境，母語といった個別の条件に応じて取捨選択できる柔軟性をもった文法シラバスを作成する。たとえば，ビジネス場面で日本語を使う必要がある学習者は，尊敬語や決まったパターンの挨拶表現などを学習する必要があるが，交換留学生として日本の高校に来る学習者はこのような表現を学習する必要はない。また，日本国外でアニメに興味をもって学習を始める学習者の場合は，縮約形やオノマトペなどが早期に導入された方が良いが，それらは「聞く」「読む」という受容技能だけで

よく，「話す」「書く」という産出技能にまでつなげる必要はない。

ここまで述べてきた「日本語教育文法」や「文法シラバス」を，恣意的でなく体系性をもった形で整理するためには，学習者が必要な言語活動を文法，文型の面から知るための「ニーズ調査」，そこで使われている言語項目を知るための「目標言語調査」，それを分析する「目標言語分析」といった基礎的作業を通じて，実証的なデータを蓄積していくことが必須である。さらに，試作した教材を実際に用い，現場からフィードバックを得て改良を重ねることが必要である。このような作業を繰り返すことによって，実用に耐える教材を完成させることが可能になる。

４．研究成果

(1)ウェブ教材のコンテンツを，技能ごとのグループに分かれて作成した。４カ年の活動の結果，1000 弱の日本語教材（試行版，紙版）が完成した。

(2)教材作成のプロセス，作成した教材について，学会発表，論文発表を行った。

(3)４カ年の活動を報告書（Ａ４版 396 ページ）にとりまとめ，関連機関，研究者に送付した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

(1)松崎寛（2008）「聞く教育」『日本語学』第 27 巻第 5 号，明治書院，229-237，査読なし（依頼論文）

〔学会発表〕（計２件）

(1)桑原陽子・中道一世・野田尚史（2008 年 10 月 12 日）「「読む」コミュニケーションのための初級教材の作成と試用」（一般発表：ポスター），2008 年度日本語教育学会秋季大会（山形大学）

(2)小林ミナ・名嶋義直・品田潤子・宮崎聡子（2008 年 7 月 11-13 日）．「コミュニケーションのための「話す」教材」（一般発表：口頭），日本語教育国際大会（釜山外国語大学，韓国）．

〔図書〕（計３件）

(1)小林ミナ（2009）「教室活動とリアリティー」小林ミナ・衣川隆生(編・著)『日本語教育の過去・現在・未来 第３巻 教室』，凡人社，94-118.

(2)名嶋義直（2009）「母語話者による母語話者ロールプレイング発話の評価からわかることー口頭コミュニケーション文法へのアプローチー」小林ミナ・日比谷潤子(編・著)『日本語教育の過去・現在・未来 第５巻 文法』，凡人社，98-124.

(3)野田尚史（編），小林ミナ・白川博之・フォード丹羽順子・松崎寛・山内博之・由井紀久子他（著）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版，全 221 ページ.

〔その他〕

(1) 小林ミナ（2009 年 3 月 8 日）「コミュニケーションから文法を見る：ロールプレイを乗り越えよう」講演およびワークショップ「コミュニケーションのための日本語教育文法を考える」（福井県国際交流協会，福井）.

(2) 野田尚史（2009 年 3 月 6-8 日）「「聞く」「話す」「読む」「書く」のための日本語教育文法」講演およびワークショップ，ドイツVHS(市民大学)日本語講師の会全国研修会（ドイツ，マルクトブライト）.

(3) 野田尚史（2009 年 2 月 21 日）『“生活者としての外国人”のためのコミュニケーションを重視した文法」（招待発表） 群馬県外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発に関する運営委員会主催地域のコミュニティー促進に寄与する日本語教員養成 特別セミナー『“生活者としての外国人”に対する日本語教育にどう取り組むか？」（群馬県庁，群馬）.

(4) 野田尚史（2009 年 1 月 31 日）「国際化時代における日本語コミュニケーション能力の育成―日本語教育の視点から―」（講演およびワークショップ）（高知大学総合教育センター，高知）.

(5) 野田尚史（2009 年 1 月 17 日）「コミュニケーションのための日本語教育における文法の役割」（講演） (財)石川県国際交流協会 日本語教育研修講座(石川県国際交流センター，金沢).

(6) 野田尚史（2008 年 9 月 22 日）「文の構造を教える日本語教育からコミュニケーションのための日本語教育へ」（講演）江蘇大学外国語学院日語学科学術講演会(中国，江蘇大学).

(7) 野田尚史（2008 年 9 月 21 日）「漢字系学習者のための日本語の読解教育・作文教育の革新」（講演）中国大学外語教学研究会日語分会・中国大学外語教学指導委員会日本語部主催第４回中国大学日本語教育研究国際シンポジウム(中国，湖南大学).

(8) 野田尚史（2008 年 7 月 5 日）「日本語のコミュニケーション能力を高めるためには何を教えればよいか？」(講演)(財)京都国際文化協会主催KICAセミナー(京大会館，京都).

(9) 野田尚史（2008 年 7 月 27 日）「コミュニケーションのための日本語教材」（招待発表）日本語教育学会テーマ領域別研究会「多文化共生社会における日本語教育研究会（日本語教育文法を活用する）」

第４回研究会(一橋大学，東京).

(10) 野田尚史（2008 年 2 月 22 日)「コミュニケーションのための日本語教材」（講演）国際交流クラブKoKoC　堺ボランティア日本語教師養成講座（堺市産業振興センター(じばしん南大阪)，大阪).

(11) 野田尚史（2008 年 1 月 26,28,30 日)「日本語教育における文法の役割を見直す」（講演及びワークショップ）2007 年度日本語教育冬期研修会　(財)交流協会主催（台湾). 1 月 26 日：(財）交流協会台北事務所（台北)，1 月 28 日：静宜大学（台中)，1 月 30 日：文藻外語学院（高雄）

(12) 小林ミナ（2007 年 10 月 19-20 日)「コミュニケーションのための日本語教育文法」(講演およびワークショップ)2006 年度シンガポール日本語教育セミナー『コミュニケーションのための日本語教育文法を考える』（シンガポール教育省，シンガポール).

(13) 野田尚史（2007 年 9 月 22 日)「日本語教科書を疑おう！― コミュニケーションに必要な日本語を教えるために―」（講演）新潟共生会議（下越地区）研修会 新潟大学国際センター主催（新潟大学新潟駅南キャンパス「CLLIC」, 新潟).

(14) 野田尚史（2007 年 8 月 13 日)「日本語教育の文法，再点検！」（講演）2007 年度（第 64 回）日本語教師のための夏季集中ブラッシュアップ・セミナー(言語文化研究所附属東京日本語学校, 東京).

(15) 小林ミナ（2007 年 8 月 31 日)「コミュニケーションから文法をみる」（講演およびワークショップ）平成 19 年度MIA日本語ボランティア研修会（宮城県国際交流協会).

(16) 野田尚史（2007 年 7 月 28 日)「日本で生活する外国人にとって必要な日本語文法とは？」（講演） 岩手大学国際交流センター主催 平成 19 年度岩手大学公開講座（岩手大学地域連携推進センター, 岩手).

(17) 野田尚史（2007 年 6 月 30 日)「コミュニケーションのための日本語教材作成」（ワークショップ）九州英数学舘国際言語学院教員研修(福岡).

(18) 松崎寛（2007 年５月 26 日）シンポジウム「聴解教育の方法と可能性」（コーディネータ，趣旨説明および司会）日本語教育学会春季大会（桜美林大学).

(19) 野田尚史（2007 年 3 月 14 日)「コミュニケーションのための日本語教育文法― 日本語教育の常識を疑おう―」（講演）国際交流基金バンコク日本文化センター2006 年度第２回日本語教育セミナー（バンコク，タイ).

(20) 小林ミナ（2007 年 3 月 3-4 日).「コミュニケーションのための日本語教育文法」（講演およびワークショップ）2006 年度マレーシア日本語教育セミナー『コミュニケーションのための日本語教育文法を考える』（国際交流基金クアラルンプール日本文化センター，マレーシア).

(21) 小林ミナ（2007 年 2 月 3 日).「コミュニケーションのための日本語教育文法」（講演）（財）石川県国際交流協会『平成 18 年度第５回日本語教育研修講座』（石川県国際交流センター，金沢市).

(22) 小林ミナ（2007 年 1 月 22 日).「「話す」能力を伸ばす教室活動（２）ロールプレイを乗り越える」（講演）しんじゅく多文化共生プラザ１月ブラッシュアップ講座（しんじゅく多文化共生プラザ，東京).

(23) 小林ミナ（2006 年 12 月 18 日).「「話す」能力を伸ばす教室活動（１）日本語運用の実態を見直す」（講演）しんじゅく多文化共生プラザ 12 月ブラッシュアップ講座（しんじゅく多文化共生プラザ，東京).

(24) 野田尚史（2006 年 9 月 30 日)「一人ひとりのニーズに合わせた日本語教育の可能性」（ワークショップ）福岡ＹＷＣＡ修了生会研修会ワークショップ(福岡).

(25) 小林ミナ（2006 年 9 月 16 日).「コミュニケーションのための『話す』教材とは？」（講演）日本語教師のためのブラッシュアップコ-ス 10 周年特別企画「コミュニケーションのための日本語教育と教材」(ＪＡＬアカデミー, 東京).

(26) 野田尚史（2006 年 9 月 15 日)「「聞く」「話す」「読む」「書く」のニーズに対応した日本語教育」（講演)「「聞く」「話す」「読む」「書く」のニーズに対応した日本語教材」　（講演およびワークショップ）第 11 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(ウィーン大学, オーストリア).

(27) 野田尚史（2006 年 6 月 17 日)「コミュニケーションのための日本語教材とは？」（講演）日本語教師のためのブラッシュアップコ-ス 10 周年特別企画「コミュニケーションのための日本語教育と教材」(ＪＡＬアカデミー, 東京).

(28) 野田尚史（2006 年 4 月 15 日)「一人ひとりのニーズに合わせた日本語教育を目ざして―『コミュニケーションのための日本語教育文法』のコンセプト―」（講演）にほんごの凡人社大阪営業所主催日本語サロン研修会(愛日会館，大阪).

(29) 野田尚史（2006 年 3 月 6 日)「コミュニケーション教育を考えるときの視点」

（講演）第６回東京大学日本語教育連絡会(東京大学留学生センター，東京).
(30) 野田尚史（2005 年 11 月 19 日）「中国語話者に期待される日本語研究の新展開」（講演）台湾日本語言文芸研究学会第五回定例学会 日本言語文化研究国際シンポジウム－日本語と中国語の接点－（長榮大学，台南).
(31) 野田尚史（2005 年 8 月 8 日）「日本語学的な文法に縛られない日本語教育の可能性」（講演）(財)日本語教育振興協会平成 17 年度日本語教員研究協議会(国立オリンピック記念青少年総合センター，東京).
(32) 野田尚史（2005 年 5 月 7 日）「新しい日本語教育文法の設計図－ 一律の文法から学習者ごとの文法へ－」（講演）津田塾大学言語文化研究所　言語学習の個別性とその対応に関する研究会(津田塾大学，東京).

６．研究組織
(1)研究代表者
［平成 17 年度-平成 21 年度］
小林　ミナ（KOBAYASHI MINA）
早稲田大学・日本語教育研究科・教授
研究者番号：70252286

(2)研究分担者
［平成 17 年度-平成 21 年度］
野田　尚史（NODA HISASHI）
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：20144545
松崎　寛（MATSUZAKI HIROSHI）
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：10250648
［平成 17 年度-平成 18 年度］
白川　博之（SHIRAKAWA HIROYUKI）
広島大学・教育学研究科・助教授
研究者番号：20216188
由井　紀久子（YUI KIKUKO）
京都外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：20252554
山内　博之（YAMAUCHI HIROYUKI）
実践女子大学・文学部・助教授
研究者番号：20252942
宮谷　敦美（MIYATANI ATSUMI）
岐阜大学・留学生センター・講師
研究者番号：40293584
［平成 18 年度-平成 19 年度］
名嶋　義直（NAJIMA YOSHINAO）
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：60359552
松岡　洋子（MATSUOKA YOKO）
岩手大学・国際交流センター・准教授
研究者番号：60344628
堤　良一（TSUTSUMI RYOICHI）
岡山大学・社会言語文化科学研究科・助教授
研究者番号：82325068

(3)連携研究者
［平成 20 年度-平成 21 年度］
名嶋　義直（NAJIMA YOSHINAO）
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：60359552
松岡　洋子（MATSUOKA YOKO）
岩手大学・国際交流センター・准教授
研究者番号：60344628
奥野　由紀子（OKUNO YUKIKO）
横浜国立大学・留学生センター・准教授
研究者番号：8061880
副田　恵理子（SOEDA ERIKO）
藤女子大学・文学部・講師
研究者番号：90433416